

『釈摩訶衍論』 所説の因縁分の特徴について

中 村 本 然

抄録

因縁分には、八種からなる『大乘起信論』の造論の理由が説示されている。八種の因縁については従来、法蔵が『大乘起信論義記』で論じるように、第一因縁を総、第二因縁以下の七種の因縁を別とする理解がされている。その法蔵は第二因縁を「立義分」並びに「解釈分」中の顯示正義・対治邪執のための因縁とする。元曉は『起信論疏』において、因縁分中の第一因縁にある因縁総相に注目し、二種の理解を示す。一つには『大乘起信論』は衆生の離苦得樂のために撰述された由縁を陳べ、二つには立義分の縁となるとする解釈を明かしている。『釈摩訶衍論』は第一因縁を立義分の正因縁とみなす。そして因縁総相の総を八種の根本総体とし、相を二十四種の別相とし、立義分で建立される三十二種の法門と関連づける註釈を推し進める。即ち『釈摩訶衍論』は『大乘起信論』の意向が立義分にあることを唱え、「勧修利益分」解釈や廻向遍布門（流通分）解釈においても同様の主張を展開する。

因縁分解釈において『釈論』は、不定聚の衆生はいうまでもなく、正定聚や邪定聚の衆生も視野に入れた釈明を行う。とりわけ声聞・縁覚の二乗に配慮する姿勢がみられことが指摘される。二乗を所化の対象とする理解は慧遠の『大乘起信論義疏』に窺える特徴と考えられよう。

一、問題の所在

『大乘起信論』（後、起信論と略す）の因縁分には、八種からなる造論の主旨が述べられている。因縁の第一は因縁総

相と称されるように、造論の総論的な理由が明かされ、後の七種は別相として具体的な理由が縷々綴られる。併せて正宗分中の立義分・解積分・修行信心分・勸修利益分に配する対応が施されている。ところで『釈摩訶衍論』（後、釈論と略す）は第一の因縁総相を立義分に配当せしめ、『起信論』の意向は立義分の教説にみられることを主張する。立義分を軸とする論の展開は『釈論』全体を通じて幾度となく繰り返されることになる。『釈論』の視点と同質の構えを見せる註疏に元曉（617-686）の『起信論疏』がある。『釈論』の因縁分の捉え方、並びに立義分との関連について、元曉の思想的影響を考慮しながら、検討することにした。

二、正宗分としての因縁分・立義分・解積分・修行信心分・勸修利益分について

承知のように『起信論』は正宗分中に因縁分・立義分・解積分・修行信心分・勸修利益分の五分を建立し説明を施す。^①『釈論』は正宗分の因縁分を左記のように概説する。

「次に建立を明かさん。本に曰く、

説くに五分有り 云何が五と為る 一には因縁分 二には立義分 三には解積分 四には修行信心分 五には勸修利益分なり

論じて曰く、何が故にか次第、是くの如くなるや。教法の出現すること、法として是くの如くなるが故に。此の義、云何。上味の妙薬は当に所対の疾障に由りて出現し、能化の教法は定んで所治の機根に由りて發起すべし。疾の前には薬無く、機の先には教無きことを顯示せんと欲うが為の故に。初に因縁分を立つ。^②」

『釈論』は正宗分中の五分に関して、機根論や如意宝珠に基づく解釈を示すことになる。因縁分について『釈論』は、殊勝なる妙薬が疾病や障碍に応じて処方されるように、衆生教化のための教法も治すべき衆生の機根に依じて提出される。このように病の前には薬は必要でなく、教化すべき衆生に先立つて教法が指し示されることはない。因縁分の施設される由縁である。続く立義分は如意宝珠に譬えた説明が試みられる。

「如意宝珠は唯しは一なりと雖も一切の諸宝の根本たり。摩訶衍の法は、唯し是れ一なりと雖も恒沙の法門の体性たり。重威の大龍の乃し受用する所、利根の智者の乃し領解する所なることを顯示せんと欲うが為の故に。第二に立義分を立つ⁽³⁾。」

如意宝珠は唯一なるものであり、あらゆる宝の根本とされる。そのように摩訶衍の法は唯だ一つであるけれども、無量なる法門の体性である。如意宝珠は龍王のような大龍が所持し依用するものであり、摩訶衍法は機根の優れた利根の智者が了解する法といえよう。立義分の施設される由縁である。続いて解積分についてである。如意宝珠は無量の万宝を内包するが、多くの群龍は多様な門が開かれることによって万宝を知ることになる。

「摩尼宝蔵は無量の万宝を備うと雖も、千重の門を開いて群竜は了知する所なり。大乘の本法は無辺の千義を円かんと雖も、別釈し散説して鈍根は分明する所なることを顯示せんと欲うが為の故に。第三に解積分を立つ⁽⁴⁾。」

摩訶衍法は無量なる真理を円満していても、機根の優れない鈍根の衆生は、別に詳しく解説されることによって漸く把握するに至るのである。次に修行信心分。

「眼耳の中に宝雨の妙術を見聞し、思心の中に無尽の円徳を解知すと雖も、而も舌威をのみ出現して競いて門に入り往向を開通せず。隔障に近かざれば如意宝蔵を得て、台宮に登るに由無し。口語の中に教義の尊辞を誦持し、思心の中に広略の深理を觀察すと雖も、加行を勤め勝進を添なうること金剛に方えて、堅固の信を起さざれば法界宝蔵を得て玄理に契うに由し無きことを顯示せんと欲うが為の故に。第四に修行信心分を立つ⁽⁵⁾。」

眼根や耳根によって如意宝珠の妙なる術を見聞し、心に無尽なる円満の徳のことを了解するにいたっても、ただ口先だけの知識を競いあうことに留まる。修行の門を叩くことがなければ生滅門を開き通じることとできない。まして真如の境涯を体得することがなければ、如意宝珠を獲得して摩訶衍法の蓮台に乗ることは難しい。たとえ口で教義の妙なることを唱え、思心に広論・略論の深遠なる教理を觀察していても、摩訶衍法を体認するために精進し修行することや、金剛なる堅固な信心を起こすことなくして、甚深なる玄理に到達することはない。修行信心分の施設の謂れである。

最後に勸修利益分である。広説や略説によつて論じられた法を開き、進入するための方法の門が顯示されていても、堅固な信を伴わない脆弱なる衆生は広説の法門を聞いて進んで修行することができない。

「広略の法を開き進入の門を示すと雖も、而も怯弱の衆生は広説の法門を聞いて進んで修行するに堪えざるが故に。鈍根の衆生は略説の法門を聞いて解すること能わざるが故に厭離の心を生ず。是くの如く等の衆生類は若し勸請の縁に値うときは、漸漸に進修して百行の因を備え万徳の果に至る。若し勸策の縁に値わざれば、弥弥遠退して恒沙の煩惱と將にして無性に及びなん。馬鳴菩薩、是の利を見たまうが故に、利益を顯示して修行を勸請す。是の故に後に勸修利益分を立つ。」^⑥

また機根の勝れない鈍根の衆生は、領解しやすいように纏められた簡略なる法門を聞いても、解することができない。却つて厭離の心を生起することになる。このような衆生は勸請の縁に巡り逢つた時に、正しく徐々に精進して万行ともいふべき様々な修行を経て、萬徳の果を成就することになる。もし機縁に遭遇しない時には、愈々精進から後退して無量の煩惱と共に、無仏性にも墮すことになる。馬鳴菩薩はこの理りに透徹されているので、功徳を示して修行を勧められるのである。

このように正宗分は五分で構成されているが、『釈論』は五分建立の理由を更に補足する。

「何の因縁有つてか増せず減せず、唯し五分を立つる。頌に曰く

彼に大総地の 五十の法門を撰するが故に 是の故に増減せず 唯し五分をのみ建立す

論じて曰く、馬鳴菩薩の十万の嘸吒南の大総地論の中に総じて五十の門を立てて、諸の教理を判釈す。今此の論の中に五分の法門を立てて、各彼の十門を撰す。是の故に増せず減せず。唯し五分を立つ。所謂彼の論の建立所化円満等の十門は因縁分の所撰なり。百六十摩訶衍等の十門は立義分の所撰なり。安立隨順決択等の十門は解釈分の所撰なり。修集決定趣入等の十門は修行分の所撰なり。勸請呵責引導等の十門は勸修分の所撰なり。已に建立門を説きつ。」^⑦

馬鳴菩薩の撰述した『大総地論』には、五十の法門が建立され、教理が開演されている。『起信論』所説の五分は、五十の法門中の十門をそれぞれに収斂したものである。即ち『大総地論』所説の建立所化円満門等の十門は、『起信論』の因縁分の所摂である。百六十摩訶衍等の十門は立義分、安立随順決択門等の十門は解積分、修集決定趣入等の十門は、修行信心分、勧請呵責引導等の十門は勧修利益分である。

『大総地論』はこのように正宗分中の五分の思想的典拠とされ引用されるが、『釈論』の論主が明かす馬鳴菩薩の撰述した『起信論』をはじめとする十論からなる撰義論の中に、この論を見出すことはできない。九十種の花文論に含まれている可能性は残されているが、『起信論』などの撰義論と同一相を呈しているのか判然としないままである。

三、因縁分の八因縁と正宗分〈因縁分・立義分・解積分・修行信心分・勧修利益分の五分〉の関係

『起信論』の因縁分にはこの論を造論した理由が陳べられる。開示される八種の因縁は、一般には第一因縁は造論した総括的な趣旨が明かされ、後の七種の因縁は別釈にして、論を撰述した具体的な内容と受け取られてきている。『釈論』は八因縁中の第一は立義分の正因縁、次の第二・三の因縁は解積分の正因縁、続く四つの因縁は修行信心分の正因縁、後の一因縁は勧修利益分の正因縁に配する解釈を施す。

「次に唱章判説門を説かん。本に曰く」

初に因縁分を説かん。問うて曰く何の因縁有りてか而も此の論を造る。答えて曰く、是の因縁に八種有り。云何が八と為る。一には因縁総相。所謂衆生をして一切の苦を離れ究竟の樂を得せしめんが為なり。世間の名利恭敬を求むるには非ざるが故に。二には如来根本の義を解釈して諸の衆生をして正解不謬ならしめんと欲うが為の故に。〈中略〉八には利益を示して修行を勧めんが為の故に。是くの如く等の因縁有る所以に論を造るべし。

論じて曰く、是の八因縁の中に、初の一つは立義分の為に正因縁と作る。次の二は解積分の為に正因縁と作る。次

の四は修行信心分の為に正因縁と作る。後の一は勸修利益分の為に正因縁と作る。⁽⁸⁾

前述したように、八種の因縁については、第一因縁は総括的な理由が述べられ、残る七種の因縁は別釈とされ、その理由を詳述する、と理解されてきている。『起信論』の注疏の中でも代表的な法藏(633-712)の『大乘起信論義記』(後、義記と略す)には

「辨相の中、初めに一は是れ総、後の七は是れ別なり。爾る所以は、総は兼正に通じ、別は当機の為にす。故に爾るべきなり。(中略)二に論主自ら云わく。我れ生を益せんが為の故に斯の論を造す、名利等の為に非ず。此の一門は一切の菩薩の心に通ず。此の論に局るに非ず。故に総相と云う。又此の一部の論に通じて発起の由と為す。故に因縁総相と云うなり。」

第二には如来の根本の義を解釈して、諸の衆生をして正解して謬らざらしめんと欲するが為の故なり。別の中に各別して下の文を発起す、別して当機の為にするが故に。中に於いて初めには下の立義分と解釈分の顕示正義と対治邪執とのために発起の因縁を作る。⁽⁹⁾

とある。つまり第一因縁を総、第二因縁以下の七因縁を別と分類する。『義記』では第二因縁を「立義分」並びに「解釈分」中の顕示正義・対治邪執のための因縁としている。

繰り返すまでも無く『釈論』は第一因縁を立義分のための因縁として、註釈を通じて立義分を軸とする論を展開する。第一因縁を立義分と捉える機因として、元暁の『起信論疏』の影響が推測される。『起信論疏』には、

「初めに総相と言うに其の二義あり。一には、凡そ諸の菩薩の為作する所有る毎に、衆生の離苦得楽の為にして、独り此の造論の因縁に在るに非ざるが故に、総相と曰う。二には、此の因は立義分の文に望めて縁と作ると雖も、然も彼の立義分は総じて解釈分等の為に本と作る。此の因は亦た通じて彼が為に縁と作る。是の義に依るが故に、亦た総相を解す。⁽¹⁰⁾」

と明かし、『起信論』の第一因縁という因縁総相に対して、二種の理解を提示している。一つには、衆生の離苦得楽の

ために菩薩が論を認めるように、『起信論』が撰述された意味も同様である。一つには、『起信論』所説の立義分の内実は続く解釈分などの根本となっている。従つて総相の意を立義分として解することもできよう、として第一因縁を立義分のための因縁と捉える。尚、第二因縁以下を別因とするが、第二因縁は解釈分中の顯示正義と対治邪執の因縁に配している。

「此れより下の七種は是れ其の別因なり。唯し此の論の為に而も因と作るが故に。下の七処を望むるに別縁と作るが故に。第二の因とは、解釈分の内に三段有る中に、二段の為に而も因縁と作る。謂わく顯示正義と対治邪執となり。」^⑪

ところで柏木弘雄博士は『大乘とは何か』において、第一因縁に示される「衆生をして一切の苦を離れ、究竟の樂を得しめんがため」や「世間の名利と恭敬を求めず」という表現に触れ、これは仏教の諸経論が繰り返す表現にして、『起信論』本論にかかる理由を形式的に表わしていると言われる。その一方で、第二の因縁が「如來の根本義を解釈する」とあることに注目し、『起信論』全体が立義分の提示する大乘の根本を解説し論述したのが『起信論』とする視点に立つならば、第一の因縁総相を立義分としてみることもできると解されている。

〔海東疏〕第二の解釈の仕方にも捨てがたいところがあると思う。つまり、第一の因縁は立義分のために説かれたものであるが、立義分は解釈分以下の論説の根本であるから、この因縁を総相と解するというのである。

その点について、つぎの第二の因縁は「如來の根本義を解釈する」ところの論説を指しているのであるが、立義分に説かれた大乘の宗要を解釈することが、起信論の骨格としての「立義」にたいする「解釈」の意味であるとするならば、第一の因縁総相を、所釈の如來根本義を宣言するところに立義分にかけて理解することも十分にできるであらう。^⑫ ○は筆者

元曉は『起信論疏』で第一因縁に二種の理解をみせながらも、第二因縁に関して解釈分中の顯示正義・対治邪執のための因縁とする。同じような配当を『釈論』にみることができる。このように『起信論疏』は『起信論疏』の思想的影響を

少なからず受けていることが考えられる。序でながら『釈論』の第八因縁の後には「第八の因縁を説きつ。一切の諸の教法は皆、立義分に尽き、一切の諸の所化の機は皆、初めの因縁に尽きぬ¹³⁾」とあり、あらゆる教法はすべて立義分に網羅されており、教化されるべき様々な機根は因縁分に尽きている、とする記述が散見することに注目しておきたい。

四、因縁分所説の八因縁

これより因縁分に論じられる八種の因縁について検討しよう。まず第一の因縁である。因縁総相と銘打たれるように、論を撰述した理由が総括して披露される。『釈論』は撰述の理由を立義分の教理にあると主張する。従って因縁総相の解釈も立義分と関連させる記述となっている。

「初の一つの因縁の中に則ち四門有り。後の七因縁の中に各三門を具す。云何が四と為る。一には能化教法出興門。二には所化衆生分際門。三には出興作業善巧門。四には除遣諍論誹謗門なり。云何が三と為る。謂わく前の三門なり。今、当に相を挙げて次でに隨うて別釈すべし。因縁総相とは総じて能化教法出興門を挙ぐ。謂わく八種の根本総体の為に正因縁と作る。故に因縁総と言う。二十四種に分離別相の為に正因縁と作る。故に因縁相と言うは三十二種の総別の法相は立義分の中に自ら当に顕説すべし。為令衆生とは総じて所化衆生分際門を挙ぐ。謂わく邪定聚の十億八万六千種の衆生と、不定聚の三十種の衆生と、正定聚の一百二十種の衆生とを摂するが故に。一切の苦を離れ究竟の樂を得とは総じて出興作業善巧門を挙ぐ。謂わく三聚を縁じて而も境界と為して、妙法要を宣説し開示することは、一切無量の衆生をして生滅無常の苦を遠離し根本総相の樂を獲得せしめんと欲うが故に。」¹⁴⁾

因縁総とは立義分中に建立される八種の根本総体のための因縁であり、因縁相は八種根本摩訶衍から開設される二十四種の別相とみる。教化の対象となる衆生については、邪定聚の十億八万六千種の衆生と、不定聚の三十種の衆生と、正定聚の一百二十種の衆生とする。三定聚を視野に入れた構想は『釈論』の特徴と考えられる。

また馬鳴が第八地即ち不動地の境位にも関わらず、法雲地の菩薩等をも教化の対象とすることは、境涯の高い菩薩に

進言することにもなり、『起信論』の造論が名誉や利益を求める行為とみなされる。このような疑義について『釈論』は、馬鳴は久遠劫の過去において正覺位にあった光明如來の時の衆生を利益するという誓願を果たすために、仮りに下位の菩薩の様相を現していると釈明する。

「世間の名利と恭敬とを求むるに非ずが故にとは総じて除遣諍論誹謗門を挙ぐ。謂わく愚の衆生、是くの如くの疑を作す。馬鳴菩薩は位不動に居して未だ法雲に及ばず。而も上地の諸の菩薩等を縁じて其の所化の境界と為すは、唯し自の殊勝を顕わして名利等を求むるに為んぬ。其の虚言のみ有りて実義有ること無し。豈に下地の菩薩、上地の菩薩を教化することを得べけんや。是の故に馬鳴、是くの如くの不信の疑いを遣らんが為の故に、自ら通じて言たまわく、我れ久遠劫に正覺を成し已れり。而も教化を助けて群生を利益し本願を満せんが為の故に、權に藍修の位を示す。名利等を欲求せんと謂うが故に。是くの如くの説を作すには非ず。已に初めの因縁を説きつ。」¹⁵⁾

第二の因縁である。解積分中の顯示正義と対治邪執のための因縁と分類される。

「第二の因縁に如來根本の義を解釈すと言うは総じて能化教法出興門を挙ぐ。謂わく是の因縁は能く顯示正義と対治邪執との為に正因縁と作る。故に如來根本の義と言う。所以何者となれば、十方三世の一切如來は一仏として根本の二心・二門・七種の対治の為に正覺を成ぜざること有ること無きが故に。諸衆生をしてとは総じて所化衆生分際門を挙ぐ。謂わく十億八万六千種の邪定聚の衆生を摂するが故に。正解不謬故とは総じて出興作業善巧門を挙ぐ。謂わく邪定聚の狂乱の衆生を縁じて而も境界と為して顯示正義・対治邪執の甚深の法を宣説し開演することは、恒沙の謬邪の解を正しうし塵数の逆乱の見を摧き、其の闡提不信障を断除して十信の大道に趣入せしめんが為の故に。已に第二の因縁を説きつ。」¹⁶⁾

第二因縁で対象となる衆生は、十億八万六千種の邪定聚の衆生である。法蔵(643-712)は『義記』において、「地前の三賢位の勝解行位の諸菩薩等」¹⁷⁾とし十住・十行・十廻向位の菩薩とみる。法蔵が第二の因縁を「立義分及び解積分の顯示正義・対治邪執」¹⁸⁾とすることからの相異と考えられよう。『釈論』が第一因縁で対象とするのは、邪定聚の十億

八万六千種の衆生と、不定聚の三十種の衆生と、正定聚の二百二十種の衆生であつた。ともあれ邪定聚の衆生と三賢位の菩薩という教化の対象の違いは留意しておきたい。

第三の因縁は、解積分中の分別発趣道相のための因縁である。

「第三の因縁は分別発趣道相の為に正因縁と作る。是れを名づけて能化教法出興門と為す。謂わく三種の発心なり。善根成就の衆生とは、総じて所化衆生分際門を挙げ。謂わく上品十信と三品の十解と三品の十行と三品の十向と三品の十地との諸の衆生を摂するが故に。摩訶衍の法に於いて堪任して信心、退せざる故にとは、総じて出興作業善巧門を挙げ。謂わく二聚の衆生を縁じて、而も境界と為して三発心を宣説し開示することは自分を超過し勝進を獲得せしめんが為の故に。已に第三の因縁を説きつ。」¹⁹⁾

この因縁で対象とする衆生は、上品十信の衆生と三品の十解と三品の十行と三品の十廻向と三品の十地の菩薩とする。慧遠(523-592)は『大乘起信論義疏』(後、義疏と略す)において「善根有る人」²⁰⁾をその対象と捉える。法蔵は『義記』に「十信の終心、自己満足するに当たる。故に善根成熟と云う。進んで十住の正定聚の中に入り、前の信心をして堪任不退ならしめるが故なり」²¹⁾と十信位を満たした衆生を対象とする。『釈論』は上品の十信の衆生以上とするところに相違がある。

第四の因縁である。修行信心分の四種の信心、四種の修行の因縁である。

「第四の因縁は修行信心分の四種の信心、四種の修行の為に正因縁と作る。是れを名づけて能化教法出興門と為す。善根微少の衆生とは、総じて所化衆生分際門を挙げ。謂わく十信の位の前の五心を得たる中品の衆生を摂するが故に。已に前の五つを得たるが故に、都て善根無きに非ざれば、名づけて微少と言う。未だ後の五つを得ざるが故に。具足すること能わざれば、成就とは名づけず。信心を修習せしめんための故にとは、総じて出興作業善巧門を挙げ。謂わく能く後の五つの信心を成就せしめんが為の故に。已に第四の因縁を説きつ。」²²⁾

第四の因縁は、十信の位の前の五心を得たる中品の衆生を対象とする。慧遠は『義疏』において「善根微少の衆生と

は是れ十信の人なり⁽²³⁾」と、その対象を規定する。法蔵は『義記』に「此れ十信の住心に当たる。信位未だ満たざるを以て故に善根微少と云う。」⁽²⁴⁾と明かす。

第五の因縁は、修行信心分の進門のための因縁とある。

「第五の因縁は修行信心分の進門の終わりの復た次に若し人、信心を修行すと雖も乃至諸障を免るることを得、善根増長の文の為に正因縁と作る。是れを名づけて能化教法出興門と為す。此の中の衆生は十信の位の初心を得たる下品の衆生を摂するが故に、是れを名づけて所化衆生分際門と為す。惡業障を消し等とは総じて出興作業善巧門を挙ぐ。謂わく札拌懺悔等の方便を示して、種種の業障の海を消除せしめんが為の故に。已に第五の因縁を説きつ。」⁽²⁵⁾対象となる衆生は十信の位の初心を得たる下品の衆生である。慧遠は『義疏』において「方便を示し惡業障を消すとは、無善根の人なり」⁽²⁶⁾と無善根の衆生とする。法蔵は『義記』に「四種の機は信位の初心に当たる云々」⁽²⁷⁾とし、十信位の初心の衆生とみる。

第六因縁は、修行信心分の修行止観門のための因縁である。

「第六の因縁に修習止観と言うは、総じて能化教法出興門を挙ぐ。謂わく修行信心分の修行止観門の為に正因縁と作るが故に。凡夫二乗とは、総じて所化衆生分際門を挙ぐ。謂わく十信の位の二心を得たる下品の衆生と邪定聚摂の一切の二乗とを摂するが故に。心過、対治せんがためとは、総じて出興作業善巧門を挙ぐ。謂わく両輪を以て通じて凡夫二乗の見執の過失を対治せしめんが為の故に。已に第六の因縁を説きつ。」⁽²⁸⁾

対象となる衆生は、十信の位の二心を得ている下品の衆生と邪定聚の範疇にある声聞・縁覚である。慧遠の『義疏』⁽²⁹⁾・法蔵の『義記』⁽³⁰⁾共に凡夫と声聞・縁覚の二乗を対象とする。『釈論』は十信中の二心（信心・念心）の境地にある下品の衆生（不定聚）と邪定聚の範疇にある声聞・縁覚の二乗とする。特に二乗を邪定聚とみなし不定聚よりも劣るとする応対に『釈論』固有の姿勢が窺える。二乗の扱いについては後に触れることになろう。

第七の因縁は、修行信心分の末尾にある阿弥陀佛への憶念が説諭される箇所正因縁とされる。

「第七の因縁は修行信心分の終りの復た次に衆生初めて是の法を学び乃至畢竟して生を得て正定聚に住すと云う文の為に正因縁と作る。是れを名づけて能化教法出興門と為す。此の中の衆生は十信の位の前の四心を得て、更に勝進すること能わざる下品の衆生を損す。謂わく是の世界に住しては信心成就せんことを極めて怖畏するが故に。是れを名づけて所化衆生分際門と為す。必定して信心を退せざるが故にとは、総じて出興作業善巧門を挙げ。謂わく勝縁力を以て、而も正定聚に安立せしめんが為の故に。已に第七の因縁を説きつ。」⁽³¹⁾

対象は十信中の前の四心を得ても精進しない下品の衆生である。慧遠の『義疏』は凡夫や二乗を所化の対象とする。法蔵の『義記』は「此れ上品に当たる」と説く。十信中の初心に住する衆生である。⁽³²⁾

第八の因縁は勸修利益分の因縁である。

「第八の因縁は勸修利益分の為に、正因縁と作る。是れを名づけて能化教法出興門と為す。此の中の衆生は、十億八万六千種の邪定聚の諸の衆生を損するが故に。是れを名づけて所化衆生分際門と為す。利益を示して修行を勧めんが為の故にとは、総じて出興作業善巧門を挙げ。謂わく功德を宣説して欲樂を増長し、過患を顕示して厭離を覺悟せしめんと欲うが為の故に。已に第八の因縁を説きつ。」⁽³⁴⁾

十億八万六千種の邪定聚の諸の衆生を対象とする。第二因縁の対象とする衆生の時と同様に、二度に亘って邪定聚の諸の衆生を対象とする。邪定聚にある衆生の本質も真如（或いは不二摩訶衍法）と等質であると考えるのは『釈論』特有の視点であろう。慧遠は『義疏』で二乗を対象ととしている。⁽³⁵⁾

八種の因縁の由縁を解き明かした『釈論』が重ねて強調することになるのが、因縁総相に配分する「立義分」についてである。

「一切の諸の教法は皆、立義分に尽き、一切の諸の所化の機は皆、初めの因縁に尽きぬ。何が故にか三分を開いて別釈し、七因縁を立てて散説するや。利鈍、広略、総別、不同なることを顕示せんと欲うが為の故に。」⁽³⁶⁾

一切の教理・法門は悉く立義分に開示されており、教化される衆生の機根は因縁分に網羅されている。何故に解釈分・

修行信心分・勧修利益分に開いて解説されるのであろうか？ それは所化の衆生の機根に利根・鈍根の別が存在し、論に広説・略説がみられ、総釈や別釈がそれぞれに開設されるからであるという。

本論である『起信論』の因縁分には八種の因縁が論じられている。『釈論』によると八種の因縁は、馬鳴菩薩の著した十万の嚧吒南の『大総地論』に八十の因縁の次第が論じられ、それらは修行の転昇の次第に基づくことが明かされている。

「何の因縁有りてか増ぜず減ぜず、唯し八種を立つる。何が故にか次第、是くの如くなる。頌に曰く

総じて大総地の 八十の因縁を摂するが故に 修行転勝の法 次第、是くの如くなるが故に

論じて曰く、馬鳴菩薩の十万の嚧吒南の大総地論の中に総じて八十の因縁を立てて、以て論の縁由と為す。今此の論の中の八種の因縁に各彼の論の十種の因縁を摂す。故に増ぜず減ぜず、唯し八種を立つ。是の義に由るが故に是くの如く等と言う。等の字は総じて彼の八十を摂するが故に。因縁の次第行法法爾の故に。謂わく闍提不信障を除いて十信の心を得、著我障を除いて十住の心を得、畏苦障を除いて十行の心を得、捨離障を除いて十向の心を得、異生性等の十種の障を断じて歓喜等の十種の地を証するが故に。已に八因縁を説きつ。」³⁷⁾

闍提不信障を断じて十信の心、著我障を除滅して十住の心、畏苦障を除いて十行の心、捨離障を排除して十廻向の心、異生性等の十種の障を断除して歓喜等の十種の聖地を証することになる、との釈明を加えている。因みに『大総地論』については、正宗分の箇所でも触れたように問題が山積している論である事を記しておく。

五、廻向遍布門と「勧修利益分」解釈と立義分

続いて立義分と廻向遍布門の關係について触れよう。『起信論』の流通分に相当する「諸仏甚深広大義 我今随分総持説 廻此功德如法性 普利一切衆生界」の一文を『釈論』の廻向遍布門では

「諸仏と甚深と広大義と 我れ今、分に随うて総持して説きつ 此の功德を如と法と性とに廻して 普く一切の衆

生界を利せん。⁽³⁹⁾」

と釈し、立義分所説の三十三種法門と関連させている。つまり諸仏を不二摩訶衍法、甚深を前後両重の十六所入法、同様に廣大義を前後両重の十六能入門に配する。しかも「総説」の総について

「総の字を以て、通じて一切種種の説を持するが故に。立義分の中に摩訶衍とは総なりと云うは即ち是れ此れなりや。何んが故にか、一字に通じて諸説を持するや。摩訶衍論は如意論なることを顯示せんと欲うが為の故に。」⁽⁴⁰⁾

といい、「総」が一切の説を摂持することを論じ、しかも立義分所説の「摩訶衍者総」の内実と等質と明かす。更に廻向遍布門の末尾の偈頌で立義分について

「諸の契経海を窺うに 総じて二百洛叉数有り 是くの如くの諸経の眞実の法 無量無辺差別の義 摩訶衍論の立義の中に 該摂し安立し具足して説けり」⁽⁴¹⁾

と説く。これまでに無量ともいえる仏教經典が撰述されているが、その数多くの教理が「立義分」に総括して表詮されていると論じる。

実に「勸修利益分」解釈における(三)顕離疑信功德門・(五)拳受持功讚揚門には、廻向遍布門に通じる内容が看取される。両門の教説を検証することしよう。

まず顕離疑信功德門には「此の摩訶衍の甚深極妙の広大の法門を聞き已りて」⁽⁴²⁾とあり、修行を志す衆生がいて、摩訶衍の甚深にして極妙で広大なる法門を聞き終えて、心中に疑念や畏怖・怯弱を生じることなく、軽賤や誹謗もなく、そして決定や堅固の心を生起し、尊重や愛信の心などを起こす。このような衆生は眞の仏子であり、仏・法・僧の三宝の種子を断じないで、常恒に相續し増長させ、未来を尽くすまで、諸仏に授記され、無量の菩薩に護念されると説かれる。

論点とする「摩訶衍の甚深極妙の広大の法門」に関して、普観(生没年不詳)は『釈摩訶衍論記』において

「甚深極妙広大法門とは謂わく即ち両重の所入能入の法門の名なるが故に、両重所入を能入門に望んで極深妙なるが故に、両重の能入は皆悉く各々能く自法を広め能く自法を大び能く自法の為に名義を作す故に」⁽⁴³⁾

とし、甚深極妙広大法門を前重・後重の所入や能入の法門と釈している。つまり甚深極妙を前後両重の所入の十六摩訶衍法、広大法門を前後両重の十六能入門に解するのである。宥快(1345-1416)は『釈摩訶衍論鈔』で、

「摩訶衍之甚深極妙は、十六所入。広大法門は十六能入門と分別す。一義には云わく、摩訶衍は十六所入及び不二を総表す。甚深は十六所入、極妙は不二、広大法門は十六能入と分別す。」⁽⁴¹⁾

と説く。即ち一説として真言密教に基づく教理を紹介し、摩訶衍法は十六所入摩訶衍法及び不二摩訶衍法の総てを表詮すると論じる。「甚深」は前後両重十六所入摩訶衍法、「極妙」を不二摩訶衍法、「広大法門」は前後両重の十六能入門と捉えてみせる。このように「摩訶衍の甚深極妙の広大法門」の文は、「廻向遍布門」における「諸仏と甚深と廣大義」との関連を想定する註釈と受け取れよう。

また拏受持功讃揚門では、『起信論』を受持し教理を観察する功德に言及する。衆生が、論を受持・観察することを一日或いは一夜に及んで修するならば、その衆生の得る功德は無量無辺にして言説で表現することも思量することもない。そして

「若しは二日、若しは三日乃至百日の間に受持・読誦・思惟・観察せば、不可思議の中の不可思議の故に」⁽⁴²⁾

と説示し、その功德の不可説なることを論じている。因みに宥快は受持等について、左記のように明かす。

「本論には受持・観察・修行の三種を挙げ、末論には受持・読誦・思惟・観察の四行を列す。〈中略〉鈔に云わく、受持・読誦等とは、中辺論に説く等文。この釈の意は受持・読誦・思惟・観察四行とすと見たり。」⁽⁴³⁾

『起信論』には摩訶衍の法を受持する功德と共に、観察と修行の三種の行を掲げる。『釈論』は受持・読誦・思惟・觀察の四種を論述し、それは『辯中辺論』⁽⁴⁷⁾による説であることを指摘する。宥快が鈔と示唆するのは、慈行(1062-1099頃)の『釈摩訶衍論通玄鈔』のことである。慈行は『辯中辺論』等によって、講説・聴聞・読・誦・書写・供養・転施・思惟・受持・修習の十種の行に触れている。⁽⁴⁸⁾ところで廻向遍布門の末尾を飾る偈頌には

「若し自手に斯の論卷を捧げば 百洛叉の經を捧ぐる者と名づけ 若し自口に本分を経え誦せば 百洛叉の經を誦する者と名けん（中略）何に況んや其の義理を觀察し 文の下所の詮を思惟せんをや」^⑭

とあり、挙受持功讚揚門と同様に受持・誦誦・觀察・思惟の四種行を奨励する行為の直前に陳べられるのが、「立義分」中に該摂している無量無辺の仏教の教理の事であった。

尚、真言密教の教学史において立義分所説の三十三法門が金剛界三十七尊に配され、三十七尊の内実としての自心の開顯のための真言として誦誦された信仰の経緯に関しては、既に報告している。^⑮併せて『御遺告二十五箇条』中の能作性如意宝珠に思想的な影響を与えたこと、並びに後七日御修法における如意宝珠法、或いは大師の入定時に修された如意宝珠印との関係についても、拙考を提出している。^⑯

六、『釈論』における二乗について

ところで『釈論』には因縁分の八種の因縁の教化の対象とする二乗や邪定聚・不定聚・正定聚について、疑問が呈せられている。即ち『起信論』では因縁分中の第六因縁に「六には止觀を修習するを示して、凡夫と二乗との心過を対治せしめんが為の故なり」とあるに留まるが、『釈論』には声聞や緣覺の二乗に対する配慮が色濃く窺われるからである。「何が故にか二乗の人を重ねて四処に取るや。二乗の衆生は下劣狭少にして菩提心を發し無上道に向うに、甚極切難なること、余類の衆生に超過せることを顯示せんと欲うが為の故に。

何が故にか所余の邪定の衆生を唯し三処に取るや。所余の衆生、二乗に形るに其の過失は輕きことを顯示せんと欲うが為の故に。

何が故にか不定の人を別けて三品に取るや。不定の衆生は微薄闇鈍にして決定の心を發し無上道に向うに、甚極切難なること正定の衆生に超過せることを顯示せんと欲うが為の故に。

何が故にか正定の人を三品に別たず、通総して摂するや。正定の衆生を不定に形るに其の過失輕きことを顯示せん

と欲うが為の故に。」⁽³²⁾

いま四項目からなる質疑応答を列挙してみると、次のようになろう。

①問い。八種の因縁において二乗に関して四箇所に亘つて繰り返し執り挙げられる理由はどこにあるのか？ 答え。声聞・縁覚の修行者は、機根が劣り心も狭量なために、菩提心を起して無上なる道に向かうことが、邪定聚・不定聚・正定聚の衆生に比較して難しい。二乗の人は自らを利することには精進するが、菩薩のように利他の心に目覚めることが乏しく、邪定聚の衆生よりも下劣なために、幾度となく救済の手が差し伸べられている。

②問い。邪定聚を三か所に挙げる理由は如何であろうか？ 答え。邪定聚の衆生は二乗の修行者に比べるとその過失は軽いと考えられよう。

③問い。不定聚を三品に区分する理由は何か？ 不定聚の衆生の菩提心は希薄で菩提に目覚めることにも暗く、決定なる堅固の心を生じて無上道を指向すること、正定聚に比較すると困難を極めるためである。

④正定聚を三品に区分しない理由は何か？ 正定聚の衆生は、不定聚の衆生に比べると過失が少なく軽いからである。この問題に関しては、有快（1345-1416）の『釈摩訶衍論鈔』に詳細である。⁽³³⁾ 有快は、通法（1062-1099頃）の『釈摩訶衍論贊玄疏』や普観（生没年不詳）の『釈摩訶衍論記』⁽³⁵⁾にあるように、二乗のための因縁は第一・第二・第六・第八の因縁の四因縁であり、また邪定聚を扱う因縁は第一・第二・第八の因縁であると指摘している。

『釈論』は二乗に対する考証を繰り返す。通法は「二乗の人は根器は狭劣にして小を捨て大に趣くこと難きため」と⁽³⁶⁾と釈し、二乗の人が四諦や十二因縁の法に執着して大乘の心を發起することが難しいと論じる。普観も『釈摩訶衍論記』において同様の見解を示している。⁽³⁷⁾

七、「因縁分」解釈における四種根

四種根に関しては、所説無異難問門と挙時分位決疑門の二門によって陳べられる。

まず所説無異難問門。即ち『光明大覺契經』などの百にも及ぶ經典は、無量なる仏教の教理を開示し、衆生の機根に應じる教化をして余すところがない。何故に煩わしくも『起信論』を造論することがあろうか？ 眞実の法を伝えることにおいて、これまでに著された經論に加えるような新たな教理はない。それにも関わらず『起信論』を撰述する意図は何であらうか。論を造ることによる稱賛を求めていることであらうか？ 或いはこれまでの經論に顕わされ尽くされていないとでもいうのであろうか？ との疑義が起されている⁽³⁸⁾。

質疑に対する答弁が、挙時分位決疑門である。

「答えて曰く、修多羅の中に此の法有りと雖も、衆生の根行、等しからざるを以て、受解の縁、別なりとは総じて決疑門を挙ぐ。所謂馬鳴自ら通じて言たまわく、三世諸仏の一切の教理は自然に常住一味平等にして移転有ること無く、起滅有ること無し。是の故に題榜差別し、翰牘不同なりと雖も而も其の教法は唯だ是れ一味なり。唯だ是れ平等なり。或いは不分、或いは不別なり。然れども衆生の根性差別にして利鈍、等しからず。心行差別にして広略不同なり。既に所化の機、異なれば能化の人も自ら同なること能わず。教法を受けしむる名字、各別なり。文義を解せしむる因縁も各別なり。謂わく或いは衆生、仏の伽陀修梨毗羅に依りて解を得る者有り。或いは衆生、菩薩の遮陀尸修梨毗羅に依りて方に解を得る者有り。故に是の人の為に當さに造論を須いるべし。」⁽³⁹⁾

馬鳴菩薩が自らが語るように、三世の諸仏の教理はすべて自然に常住不變にして一味平等であり、生滅變化するものではない。題号や著述（論書）に差異が生じていても、深遠なる教法は一味にして平等である。しかしながら、衆生の機根には差別がみられ、利根・鈍根も多種多様である。このように教化の対象となる衆生の機根が異なるので、教化する側も同様の対応はできない。自ずから教法の名字や題号を変えざるを得ない。教義の文や義理を了解させるための縁しも異なってくる。衆生には大別して仏の經説によって理解を得る衆生と、經典を更に詳述した菩薩の論によって解する衆生がある。正に後者のためにこの論が依用されるのである。はじめに如来が在世されている時の衆生については

「復た次に如来在世の時には所化清浄なれば能化、八万四千種の色と、四種の心遍智と、十種の作業と、十種の殊

勝とを円満し、六十八の梵圓と八十八の妙音と、前後有ること無く一時に敷演するに無量無辺の種類の異類或いは衆生、仏の妙色を見て解を得る者有り。或いは衆生、仏心を思惟して解を得る者有り。或いは衆生、如来の十業と十勝とを觀察して解を得る者有り。或いは衆生、仏の梵圓妙音を聴聞して解を得る者有り。是くの如く平等に明了に通達すれば則ち論を須⁸⁰いず。」

とあり、衆生の心境が清淨であるから①仏の八万四千種の妙色や四種の智・十種の作業・十種の殊勝、六十八の梵圓や八十八の妙音などによって教化するに、一たびの説法によって無量無辺の衆生は仏の妙色を觀じて解脱を得る者②仏の心を思惟して解を得る者③如来の十業と十勝とを觀察して解を得る者④仏の梵圓妙音を聴聞して解を得る者等の區別がみられるが、あらゆる衆生が平等に解脱を得ることになる。従つて佛説を詳しく解説する論典を用いることはない。

如来滅後には、仏の教説を説いた經典と併せて經典をより詳述した論典を解する衆生の機と根に、異なりが発生することになる。即ち機には声聞・緣覺・菩薩の三乗の機がみられ、根には①広自力根、②略自力根、③広無力依他根、④略無力依他根の四根の存在を提示する。

「若し仏、滅後には所化も雜乱すれば、能化、少闕せり。經論の機、異に広略の根、別なり。根は謂わく四種の根、機は謂わく三乗の機なり。云何が四と為る。一には広自力根、二には略自力根、三には広無力依他根、四には略無力依他根なり。是くの如くの四種の根性の中に初めの二は是れ修多羅の衆、後の二は是れ憂婆薩提那の衆なり。何が故にか因縁門の中には所化円満し、根性門の中には所化微少なるや。清淨の僧那阿世耶、迦那有ること無きことを顯示せんと欲うが為の故に。教を受くる実行の衆生の類、其の分際有ることを顯示せんと欲うが為の故に⁶¹。」

いわゆる①広自力根②略自力根は修多羅の範疇にある衆生にして、經典によつて解脱を得る。③広無力依他根④略無力依他根は憂婆薩提那即ち論典の補いによる衆生にして、前者と区別される。

經典や論典に広・略の教法が提出される理由については、仏世尊が忍辱仙人として修行した際の大蛇との因縁譚が綴られる『楞伽王契經』が依用される⁶²。即ち忍辱仙人が無上道を体得した仏世尊として一九十洛叉の広説の修多羅を宣説

して、意樂広大の衆生を利益し、二十洛叉の略説の修多羅を宣説して、意樂総持の衆生を利益する。

師仏世尊の入滅後に、人身を得た大蛇によつて三九十部の広説の優婆薩提那を造作して、意樂広大の衆生を利益し、四十部の略説の優婆薩提那を造作して、意樂総持の衆生を利益する。

以上のように、誓願に基づいて四種に及ぶ經・論の教法によつて衆生の教化を行なうのである。

まとめ

一、『釈論』の因縁分の特徴について眺めてみた。因縁分所説の八種の因縁については、これまで法蔵の『義記』が解するように第一因縁を総、第二因縁以下の七因縁を別と分類されている。『義記』には第二因縁を「立義分」並びに「解積分」中の顯示正義・対治邪執のための因縁とする。ところが『釈論』は八種の因縁の第一因縁を立義分に配する理解を展開し、『起信論』の主旨が立義分にあるとした論証を行なう。元曉の『起信論疏』では第一因縁の因縁総相について二種の解釈を示し、一説として因縁総相を立義分のための因縁とする理解を推し進めている。『釈論』の因縁分解釈には元曉の影響が考えられる。

一、『釈論』は、第一因縁を立義分の因縁とすると共に、第八因縁の註釈に続いて「一切の諸の教法は立義分に尽き」と総括する。その姿勢を踏襲し補うように「流通分」解釈にあたる廻向遍布門では「諸仏甚深広大義」に関して、諸仏「不二摩訶衍法、甚深」両重の十六所入法、広大義「両重の十六能入門の三十三法門に配した解釈が行われている。三十三種の法門は『釈論』が立義分で展開する教理である。廻向遍布門を意識した内容は「勧修利益分」解釈にも看取される。顕離疑信功德門の「摩訶衍の甚深極妙の広大の法門」は、廻向遍布門所説の「諸仏甚深広大義」との緊密な関連が推測され、普観の『釈摩訶衍論記』などの註疏では甚深は前後両重の所入法、広大の法門は前後両重の能入門と解されている。

一、また廻向遍布門中の偈頌には、諸經が論じる無量無辺の義理が立義分に収斂されていると謳われている。併せて立

註

義分を受持・読誦・思惟・觀察することを勧め、『釈論』の特徴として「読誦」することの功德が強調されている。この視点と同様の趣旨が「勸修利益分」解釈中の挙受持功讃揚門にも散見する。

一、『起信論』は三定聚中の不定聚の衆生のための法門とし、併せて正定聚・邪定聚の衆生の縁についてもその範疇に加えた論を展開する。ところで『釈論』は常に不定聚の衆生はいうまでもなく、正定聚や邪定聚の衆生も視野に入れた注釈を行う。とりわけ声聞・縁覺の二乗に配慮する姿勢がみられ、その理由として二乗は邪定聚より過失が重大であると捉えていることが注目されよう。二乗を所化の対象とする註釈は慧遠の『義疏』に窺える。

- (1) 『大乘起信論』(『大正蔵』三三、p.575b)
- (2) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597ab)
- (3) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597b)
- (4) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597b)
- (5) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597b)
- (6) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597b)
- (7) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597bc)
- (8) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.597c)
- (9) 『大乘起信論義記』(『大正蔵』四四、p.249a)
- (10) 『起信論疏』(『大正蔵』四四、p.204c-205a)
- (11) 『起信論疏』(『大正蔵』四四、p.205a)
- (12) 『大乘とは何か』(p.32-33)
- (13) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.598c)

- (14) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.597c-598a)
- (15) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598a)
- (16) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598ab)
- (17) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249ab)
- (18) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249a)
- (19) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598b)
- (20) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.178a)
- (21) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249b)
- (22) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598b)
- (23) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.178a)
- (24) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249b)
- (25) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598b)
- (26) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.284a)
- (27) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249b)
- (28) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598b)
- (29) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.178a)
- (30) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249b)
- (31) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598b)
- (32) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.178a)
- (33) 『大乘起信論義記』(『大正藏』四四^一 p.249c)
- (34) 『釈摩訶衍論』(『大正藏』三三^一 p.598c)
- (35) 『大乘起信論義疏』(『大正藏』四四^一 p.178a)

- (36) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.598c)
- (37) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.599a)
- (38) 『大乘起信論』(『大正蔵』三三、p.583b)
- (39) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.667c-668a)
- (40) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.668a)
- (41) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.668bc)
- (42) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.667a)
- (43) 『釈摩訶衍論記』〈『大日本統蔵経』一・七三三-一、p.79右b〉
- (44) 『釈摩訶衍論鈔』(『続真言宗全書』一〇、p.1337a)
- (45) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.667b)
- (46) 『釈摩訶衍論鈔』(『続真言宗全書』一〇、p.1339a)
- (47) 『辯中辺論』〈『大正蔵』三三・p.474b〉・『中辺分別論』〈『大正蔵』三三・p.461a〉
- (48) 『釈摩訶衍論通玄鈔』〈『大日本統蔵経』一・七三三-二・p.134右a〉
 「受持読等とは中辺論に説く講説・聴聞・読・誦・書写・供養・転施・思惟・受持・修習の十種の法行各差別の故に」
- (49) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.668c)
- (50) 拙論「立義分」読誦信仰について―金剛界三十七尊との関わりを中心として―(『高野山時報』(3059/3061/3062/3063/3064=2006年))
- (51) 拙論「真言密教における如意宝珠〈信仰〉」〈『中世の仏教』2005年〉
 拙論「真言密教の修法と如意宝珠」〈『密教文化研究所紀要』十八・2005年〉
- (52) 『釈摩訶衍論』(『大正蔵』三三、p.598c-599a)
- (53) 有快の『釈摩訶衍論鈔』(『続真全』八、p.159b-160b)には、この問題について詳細である。
 「何故二乗人重ねて四処を取るとは、是れ問いなり。四処とは八因の中に一・二・六・八の四処に取るが故なり。疏に云わ

く。二乗の四处とは一・二・六・八、此の四处に皆な邪定・二乗人有るが故に^文 記に云わく。初問答二乗の中に初に問。何故等とは謂わく前に於いて一・二・六・八の四の因縁処を明かす。重畳して取るが故に之れを以て問と為す^文（中略）邪定聚の異生を三処に取る事を問う。記に云わく。何故等とは、謂わく邪定の異生は唯だ一・二・八の三の因縁の処に顕示するが故に、之れを以て門と為す^文 疏に云わく、邪定の三処とは謂わく一・二・八なり。前の四が中に於いて第六の因を除く。彼は唯だ二乗の人を取る故に^文（中略）

不定の人に三品を分つ事を問答す。問の中に別取三品とは第三の因には上品を取り、第四は五心・中品、第五は初心・下品、第六は二心・下品、第七は四心・下品なり。此れを別取三品と云うなり。

之に付いて、疏は別取三品長に上中下を分つて三品と取る。仍つて不定長に三品を分かち、正定の人長に三品を分かち、之れ無し。故に是れを以て不定・正定の不同とすと義を取る。疏に云わく、十信の人に別して三品を分かちことは常の例に同じからず。已に上の文に見たり。但し未だ由しを知らず。此に於いて弁明す^文 記の意は十信の三品を短に入住出に分かつが故に別取三品と釈したまうと義を取る。此の二義の中に疏の釈、宜しきか。

正定を三品に分かたざる事を問答す。記に云わく。二に何故の下は問答。正定聚の中に初に問。正定聚の中に名にぞ前に同じく亦た三品に開かずして但し合して明かすや。文 之に付いて記の意は今の三品をば不定・正定共に入住出の三品と心得る故に正定の人に於いて三品の不同有るべし。爾りと雖も此の三分各別に分かたざるが故に不別三品通総撰耶と問うと義を取る。疏の意は不定の三品は是れ長に上中下を分つ三品なり。正定は長に三品を分つ事、之れ無し。故に不別三品通総撰耶と問うと義を取るなり。疏に云わく。三賢十聖、是れ入住出を分かたざるが故に、但し長に三品の異を分つが故に不定と相例して対顯す^文

- (54) 『釈摩訶衍論寶玄疏』（大日本統藏經一七二一五・p.434 左ab）
- (55) 『釈摩訶衍論記』（大日本統藏經一七二一一・p.9 左ab）
- (56) 『釈摩訶衍論寶玄疏』（大日本統藏經一七二一五・p.434 左a）
- (57) 『釈摩訶衍論記』（大日本統藏經一七二一一・p.9 左b）
- (58) 『釈摩訶衍論』（大正藏）一一一、p.599ab）

「問うて曰く、修多羅の中に具さに此の法有り。何ぞ重ねて説くことを須うるやとは、則ち是れ難問なり。謂わく光明大覺等の一百の契経の中に、一切無量の法藏を開示して機根量に隨うて摂取し利益するに闕失する所無し。中士、何ぞ煩しく此の論を造ることを用うる。重ねて彼の法を伝うるに更に加顯の力無し。而も今、此の論を造りて、彼の法を説くことは頗る称讃等の事を求むるにあらずや。畢竟尊信に其の理を尽さずや。是を名づけて所説無異難問と為す。」

(59) 『釈摩訶衍論』(「大正藏」三三三、p.599b)

(60) 『釈摩訶衍論』(「大正藏」三三三、p.599b)

(61) 『釈摩訶衍論』(「大正藏」三三三、p.599bc)

(62) 『釈摩訶衍論』(「大正藏」三三三、p.599c - 600a)

「何の因縁を以てか、兩重の広略の教法を出興する、其の相如何。頌に曰く

本願繫属の故に 此の法門を出興す 楞伽王契経に 分明に顯説するが故に。

論じて曰く繫属の因縁の力に由るが故に、兩重の甚深の法門を出興す。所以何者となれば契経の中に於いて分明に顯説するが故に。所謂楞伽王契経の中にはくの如くの説を作す。爾の時に世尊、文殊師利に告げて言たまわく、我れ、過去無量劫海を念うに、五百世に於いて忍辱仙人として山林の中に在って、専心に小欲知足の四聖衆の種種の清淨の法を修行したりき。時に一大蛇有り。山の頂從り下り、我が所に來詣して我が所誦を聞いて則ち其の体を投げて礼拝懺悔す。身を投げ己訖りて、頭を以て地に潜て、區區に文を作し偈を説いて曰さく、

我れ過去世に 忍辱仙人として 此の山に住して 六時に道を行じき 而も一時に瞋せし 因縁力の故に

今、蛇身を得て 常に大苦を受く 若し命終の後 人同分を得れば 我れ当さに弟子として 汝に隨うて修行すべし 汝が誦誦する所は 常に我れ誦せし所なり 是の故に我れ今 大慙愧を發す

是の偈を説き已りて則使命終し、後に人身を得て、則ち我が弟子たり。爾の時に互相に發願し繫属しき。謂わく是の如くの願を作す。我れ若し無上道を証せば、九十洛叉の広説の修多羅を宣説して、意樂広大の衆生を利益し、十洛叉の略説の修多羅を宣説して、意樂總持の衆生を利益せんと。即ち我が弟子、是くの如くの願を作す。我れ当さに師の滅後に九十部の広説の優婆薩提那を造作して、意樂広大の衆生を利益し、十部の略説の優婆薩提那を造作して、意樂總持の衆生を利益

せんと。此の因縁を以て、我れ今、諸の契經海を宣説す。此の因縁を以ての故に我が滅度の後、我が弟子として現に論教を造作すべしと。」

キーワード…『起信論疏』、因縁分、立義分、勸修利益分、廻向遍布門、読誦